

再採血防止を啓蒙するには動画によるアナウンスが有効である

◎村松 千尋¹⁾、天野 剛介¹⁾、稲吉 雅美¹⁾、足立 郁美¹⁾、野口 和希子¹⁾、丹羽 京太郎¹⁾
岡崎市民病院¹⁾

【背景と要旨】血液検査は有用だが、採血量の過少過多、混和不足等により、検査結果が真値から乖離し再採血が必要となることがある。再採血の防止は血液検査を扱う全ての医療機関における課題であり、当院でも問題視されてきた。我々は再採血防止を目的に、掲示板や直接連絡でのアナウンスや看護長への定期報告、再採血事例の全例報告など様々なアプローチを実施したものの十分な効果を得られなかった。これを受け我々はアナウンス手段としての動画の有効性に着目し、短時間で視聴可能かつ要点を押さえた動画（以下啓蒙動画）を作成しアナウンスを行ったところ、知識不足を背景とした再採血割合の減少に成功したので報告する。

【対象と方法】2021年1月～2023年12月を対象期間とし、啓蒙動画を配信した2022年1月前後で原因を比較した。再採血原因のうち、採血量間違い、容器違い等、教育で防止できた可能性が高いものを「知識要因」とし、その他を「その他の要因」とし、全再採血件数に対する各要因の割合を比較した。差の検定にはカイ二乗検定を

用い、 $p>0.05$ を有意水準とした。動画は①採血量の遵守、②採血後の混和法、③溶血の防止、④ラベルの見方のコーナーに分類し、7分間に纏めたものを院内に配信した。また動画視聴者にアンケート調査を実施した。

【結果と考察】対象期間中の再採血は1741件であり、原因の割合を啓蒙動画配信前後で比較すると、凝血(41%→37%)、量過多・過少(32%→21%)、溶血(16%→30%)、容器違い(4%→4%)であり、再採血の原因のうち教育の効果が期待できる知識要因による再採血は39%→28%と有意に低下した($p<0.001$)。一方で再採血の件数自体は減少しなかったが、これは再採血の報告を徹底したため、それまで報告されてこなかった再採血が表面化したことによるものと考えられた。また動画形式での勉強法について、95%の視聴者が文字や画像による教育より分かりやすい、と回答した。

【結論】動画による周知は、再採血を減らすための教育方法として効率的かつ有効である。
連絡先—0564-21-8111